
バベルよぞ編

よぞ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

バベル よぞ編

【コード】

N2305E

【作者名】

よぞ

【あらすじ】

“所持者の願いを叶える”と噂される本「バベル」偶然にもそれを手にした者達の奇妙な話。 とうか可笑しなお話

(前書き)

グループ小説十八弾。他人の設定で小説を書いてみよう。です。今回はでん助さんの『バベル』。

最初に明記しておきますが、お暇な方だけお読みください。時間の無駄なことをお約束します。

『グループ小説』で検索すると、他の素敵な作品がお読みになれます。

「いや、それは困る」

黒い本がそう言った。

落ち着いたハスキーの声だが、非常に納得のいかない答えだ。俺は冷めた目で床に転がしてある本を見下ろしていた。

「どんな無理難題にもでも答え……ほら、続き言えよ」

怒った声で本に言う。黒い本は困ったように（表情はないが）「なぜだ？」と言った。

本の分際で口答えするところがまた腹立たしい。いいから言えっつーの。

「……どんな無理難題にでも答え、汝が望む限りの願いを叶えよう。理性の殻を捨て、剥き出しの欲望を私の前にさらすがいい。我が名はバベル。黒き神の聖書、バベル」

最後まで聞かずに、ぺっ、と唾を吐き捨てる。

「……自分で言えと言っておきながら、最後まで聞かないとはどういうことだ」

「本ごときが何言ってるんだ、ばーか」

「我は黒き神の聖書、バベルであるぞ」

「うぜえんだよ、だったら俺の願いを叶えてみろっつーの」

しゃがみこんで、ノックをするようにその表紙を叩いた。できるだけ馬鹿にするような口調で話しかけている。

「……あれは困る」

「どんな無理難題でもってのはどうしたんだ、あ？」

「それはそうだが……一応ルールというものがだな」

「あーあーあー。できないならできないって言えよな。ごめんなさい。僕は何にもできないただの白紙の本です。ほら、言ってみ？」

表紙をめくり、何も書かれていないページをばらばらとめくる。

「……巨万の富でも、永遠の命でも、世界一の美女でも、何でも叶えてやる」

「馬鹿じゃねえのかこの紙野郎。俺はそんなこと言ってるねーだろーがよ」

盛大に舌打ちをして、白紙のページを一枚びりびりと破った。

「な……！ 何をするか愚か者！」

「罰だよ。本ごときが嘘をついた罰だ。嫌なら訂正しろよ。僕は何もできないただの紙くずです。って言うてみるよ」

「できないことなどあるものかっ！」

はんっ、と鼻で笑う。

「お前、願いを叶えることにリスクがあるよなあ？」

「そうだ。願いの大きさに比例するが、叶えることに使用者の周りが不幸になる」

「じゃあそのリスクをなくせ。それが初めの願いな」

「いや、だからそれは ああっ！ 破るでないっ！」

「僕はただの紙くずです」

「そんなことはないっ！ 我は …！」

「にまーい、さんまーい」

「ぐわあああ！ やっ、やめっ …！」

よんまーい、ごまーい。軽快にページを破り捨てていく。大学ノートぐらいの厚さの本なので、そうそう長くは命(?)が持たない。

「わかっ ……！ わかった！ リスクをなくそう…！」

ぴたり、と破り捨てる手の動きを止めた。

疑わしげに黒い本を見る。

「本当か？」

「うむ。特例だが……一度だけな」

「ろくまーい。ななまーい」

「ちよっ、ちよっ、ちよっ、ちよっとまで…！ 叶えると言ったではないか…？」

「はちーまーい。だって一回だけとかじゃないし。きゅーまーい」

「破るのをやめんかつ!」

「じゃあちゃんと叶えるか?」

「……二度でどうだ?」

「はいダメー」

びりびりびりびり、と何枚か同時に破り捨てる。

黒い本はさらに慌てて(たぶん)、ハスキーな声でがなり立てた。
「どっ、同時はインチキだぞ! すぐに我が無くなってしまつては
ないか!」

「別に一枚ずつとか言つてねーし。嫌ならちゃんと謝れよ」

「どうしてそんな願いを言うのだ!? ルールに則つてやってくれ
ればよいのだ!」

「だーかーらー。お前が自分のダメさ加減を認めればそうしてやる
よ」

黒い本はだんだんと泣き声になってきた。

「われっ……、我はダメではないっ! 今までだつてちゃん う
くっ、ちゃんと願いを叶えてきた! お前みたいに意地悪をする人
間はいなかつたんだ! ひくっ」

本が泣くのかよ。

「どうして人の心が理解できないのだ! 我は人間が幸せになるこ
とを願つている! その為に何百年も生きてきた! わかるか?

我が願いを叶えた人間は、必ず満足して我の事を忘れてしまうのだ
! その寂しさがお前にわかあつっつ! 何!? 何しているの
だ!?

「いや、お仕置き」

黒い本を焙るようにして、ライターの火をちらつかせた。

しばらく「あつっ! あつっい!」と叫んでいた黒い本は、ずり
ずりと火から逃げるように動き出した。おー、こいつ動けるんだな。
「なんとこの酷いことを つつ! 貴様それでも人間があつっ!
! もうあつっ!! やめんかあああああああ!!」

なんだか楽しくなってきた。これはこれで面白いかもしれない。

KUZUみたいなー!!」

「じゃあ踏んでもいいか」

「踏んじゃってー踏んじゃってー　もう豚のように扱ってくださいっ!」

「まあそこまで言うならね」

要望に応じて激しく踏みつける。しかし燃え上がった炎はなかなかおさまらない。

「もっと強く!　そうそこです!!　いいっす!　そこっす!!」

「この辺か?」

「おい、25号」

「カムヒア!　イエスツ!　そこっすよーイエスツ!!」

「25号ってば」

「だれだ我を発行号で呼ぶものは。今はそれどころでは」

息を呑むように黒い本の声が止まった。見ている先には(おそらく見ている)同じような表紙の、だが厚さが辞典ほどもある黒い本を抱えた女がいた。

どうやら話しかけてきたのは女の抱える本のようだった。

「……なにしてんの、25号?」

「わっ、わっ、我を死なせてくれえええ!!　今ここで!　っ

は、そうだ!　願え所有者よ!　世界が滅べと願ってはくれんかね!」

「願うわけねーだろ」

「ならばいつそ殺せえええええええ!!」

半焼した黒い本はばたんばたと暴れて泣き叫んでいた。

まあ、男に踏まれながら「おーいえすっ」なんて叫んでいるところを知り合いにみられたたら、俺なら生きていけないけどね。

数分後、正座して座る(イメージ的に)二冊のバベルを俺らは観察していた。

俺ら、というのはもう一冊のバベルの所有者のことだ。

所有者の性別が反映されるのか、もともとの性格が違うのか、女の黒い本は女性のよな口調で話している。

「25号。あんたもね、伝説の本なんだからもつと誇りを持ってね……」

「わかっている。しかし、私の所有者があまりにも無理な願いをだな……」

「私達に答えられない願いなんてないでしょう？」

「願いを叶えた後のペナルティを無くせ、というのだ」

「……うわー。それきついいねー」

「だろっ！？ しかもできないという和我を一枚一枚破り捨てていくのだ」

女の黒い本が俺を見た（ような気がする）。

「普通、永遠の命とか、巨万の富とか、地位、名声、とかじゃないの？」

「どうやら俺に問いかけているようだ。」

「てめえらが『どんな無理難題でも』なんて言うからだろ。嫌なら訂正しろよ」

「それは私たちを作った神が決めたことだからねえ……」

「じゃありスクを全て無くしたっていいだろ。全てに応えるんだから」

「ペナルティを作ったのも、また我らが神なのだ。愚か者」

「その矛盾が頭にくんだよねー。大体『どんな無理難題でも』『望む限りの』なんて言ったらさー、そもそもお前ら自体が存在しなくなるって気付かねーの？」

それまでずっと黙り込んでいた、所有者の女が口を開いた。

「もし僕が『全てのバベルを僕の手』とか、『未来永劫、僕以外の人間がバベルによって願いを叶えられないように』とか、『どれだけ満足してもバベルが消えてなくならないように』とか願うと、つてことだね？」

「うわっ、こいつ僕属性だよ……」。

「わ、我らはどんな願いでも叶えてみせる！」

「じゃあ俺ら以外の人類を全て殺してくれ」

「何という酷いことを！ 貴様それでも人間か!?」

「その後すぐに生き返らせるように願うからいいだろ」

「ペペ、ペナルティがあるぞ！」

「いいって。やれよ」

「いやしかし」

「もう十分だわっ!!!」

布を切り裂く甲高い声で、もう一冊のバベルが叫んだ。

「12号、お主」

「もう十分！ いつつもいつつも無理難題ばかり言われて！ 私たちがどれだけ苦労しているのかも知らずにさっ！ 何が『ペナルティを無くせ』よ！ できるわけないでしょ!? 何が『人類全てを滅ぼせ』よ！ そしたら誰が幸せになるっていうのよ!! どうして『足が悪い少女を歩けるように』とか『牛乳配達の少年が大聖堂にある絵画を拝めますように』とか願えないわけっ!? そんなんじゃクララはいつまで立っても歩けやしないのよっ!?」

ネロとパトラッシュは死んでしまうのだがいいのだろうか。

「そのあんた！ 自分のことばかり考えて恥ずかしいと思えないわけっ!? 私達の揚足ばかりとって面白いわけっ！ もっと他人のことを考えて願いを考えなさいよっ！」

良いこと言ってる。しかしだね。

「理性の殻を脱ぎ捨て、己が欲望を差し出せ、と言われたのだが」

「そっそれは」

「願いを叶えると、誰かが不幸になるペナルティがあるのでは？」

「いやっ、そのっ」

「所詮人を幸せにできない黒い本が、人の幸せを願うなんて片腹痛いね」

「殺してええええええええええええ!!! 私達は生きてはいけないのおおおおおお!!!」

「ああつ、12号が壊れたつ」

うひゃひゃひゃひゃひゃひゃ。

「待って」

すつ、と僕属性がバベルをすくい上げた。

顔と顔を向かい合わせて(たぶん)、優しい笑顔で微笑んでいる。

「しょ、所有者さん……」

涙声のバベルが、救われた子供のような声を出した。

「本ごときが『生きています』なんておこがましいのよっ！ 図にのんなー!!」

ぺつと、表紙に唾を吐きかける僕属性。

「キエ口」

「わああああああああああん!!」

泣き叫ぶ黒い本に向かつて「つーーーすりーー」なんて馬鹿にした声で言っている僕属性。なかなかやるな。

泣き叫ぶ二冊のバベルを残して、俺はその真っ白い部屋を後にした。

「トレーニング、お疲れ様でした」

見習いの女が、俺にコートを手渡した。

それを受け取り、長い廊下を歩きながら羽織った。

「ま、トレーニングというよりも、ただの憂さ晴らしだがね」

ふふ、と女が笑う。

「でも大切なことですよ。人の為に働く、ということは身を削ることでですよ」

「仕事だからね。それで、今何時？」

「1時間後に東京高裁で、殺人事件の容疑者の弁護があります。証拠も出てますし、犯行自体には弁明の余地がありません。先生の話術に依頼人も期待しています」

「裁判は、揚足取りだからな。行くか」

「はい」

相手の揚足を取るためのトレーニングマシンとして開発された『バベル』。政治家、弁護士、検事、記者など、多くの職業において、優秀な人材の育成を目的に使用されている。ちまたでは「どんな願いでも叶える」なんていう設定のみが広まり、噂されているらしいが。

(後書き)

もう小説ですらない、と。すみません。

私は『全てを消滅させてくれと願った』。あとには何も残らなかつた。

の一行でどうしても終わってしまったので、本に口ごたえさせてみたらこうなりました。

貴重な人生の数分間。申し訳ないです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2305e/>

バベル よぞ編

2009年4月13日23時08分発行